

元和元年一国一城令の影響 — 筑前国の場合 —

中村修身

一、はじめに

城郭研究は、ここ四十年、多くの資料の蓄積が^(註1)ずいぶん進んだものである。なかでも目を見張る成果として、多くの縄張り図が公表されたことである。それらを材料とした研究の素地は整ってきたといえよう。そうした状況のなかで破壊された城郭をみる事ができる。別府大学史学会において、花岡興史氏は熊本県の資料をもとに一国一城令について研究発表をされた。内容は、元和元年(一六一五)一国一城令の法制度から見た評価であった^(註2)。法制度からの問題はその道の方に譲るとして、本稿では、筑前国の場合どのようなことがいえるのか。遺跡・遺構などから検討することにした。

筆者^(註3)は、城郭の規模は城郭研究の重要な基準になることを述べた。小都隆氏^(註4)は筆者の提唱した大規模城郭、中規模城郭、小規模城郭、館に巨大規模城郭や陣屋などを入れるべきことを主張し、幾人かの研究者も大規模城郭、中規模城郭、小規模城郭と言う分類を用いており、城郭、城館研究にとって有効性をもち、一つの方向を示したと思われる。福岡県(筑前国、筑後国、豊前国)内での長年にわたる調査結果によつて、小規模城郭は天正十五年(一五八七)以降急速に使用されなくなる^(註5)ことが分かってきた。その理由は次のように考えられる。戦国時代と呼ばれた中世末期は、土地に生産基盤をおいた勢力と生産基盤を土地から切り離された勢力の内戦^(註6)であり、結果的には後者が勝利する。これにともない土地を生産基盤とする勢力の全ての城郭とともに土地を

生産基盤としない勢力の小規模城郭も不要となり、激滅する。後者、常備軍化とともに在地性を剥ぎ取られつつあった武士は、在地から切離されて中規模城郭および大規模城郭のなかに再編されている。城郭という視点からは、慶長から元和にかけて焦点となるのは中規模城郭および大規模城郭の再編である。

二、中規模城郭(支城)

筑前国の場合、慶長年間以降の城郭は極端に数が減少し、本城(大規模城郭)と支城(中規模城郭)が、合わせて九城ほど残っている。これらのうち八の中規模城郭の修築、新築、破却からどのようなことを読み取ることが出来るであろうか。まず、事例の整理と紹介をしておく。

鷹取城

中世以来豊前国境に聳える鷹取城は、鷹取山頂部に高石垣、礎石瓦葺建物、枳形小口をもつ城郭、巨大な畝状堅堀群が確認される。慶長七年(一六〇二)に黒田家重臣母里但馬友信の手によって大改修された。また、鷹取山の麓、永満寺には鷹取城の高石垣に類似する石垣の一部が残っており、母里但馬友信の屋敷跡と伝えられている。友信の館(里城)から約二百メートル離れたところに鉄砲町、横町などの地名が残っており、散在的な集落が形成されていたと思われる。また、「慶長年間筑前国図(写)」に山下町が記されている(図1)。

昭和六十一年から平成元年まで間に福岡県教育委員会、直方市教育委

員会が実施した四度の発掘調査^(註7)によつて、石垣の上部が数百メートルに亘つて壊されていること、枡形小口も石垣の上部が破壊され、それらの石で埋められていることが明らかとなった。

松尾城

松尾城は上座郡東峰村小石原に位置している。天正十年(一五八二)には松尾切寄(小石原切寄)と町(小石原)を大友勢が攻めている。城郭と町が別々に記している。この松尾切寄を守っていたのは、宝珠山山城守であろうか。慶長七年に黒田家重臣中間六郎右衛門が近世城郭に大改修している。瓦葺建物はないが、高石垣、枡形小口を持つ城である。山頂(城郭)の下に「おながや」地名が残っている。後世の境目奉行屋敷であるけれど、それ以前は中間六郎右衛門の屋敷であった可能性は捨て切れない。小規模ながら集落の存在が知られている^(註8)。

黒崎城

黒崎城は筑前国御牧郡(北九州市八幡西区)に所在する。中世では御牧郡は大内氏、毛利氏の北部九州戦略根拠地花尾城があつたが、天正十五年に廃城となつている。慶長七年に黒田家重臣井上周防之房によつて、花尾城跡より北約三キロメートルの道伯山(城山)に高石垣、瓦葺礎石建物、枡形小口をもつた黒崎城が築城された。元和元年の廃城後の宿場町建設や昭和二十年代以降の開発が進み、地表観察から土塁や堀や屋敷区画を見出すことは難しい。字図をみると黒崎城の西側に殿町屋敷の地名が残っている。また、「慶長年間筑前國圖(写)」^(註9)(図2)には藤田町とともに黒崎城の西側に山下町の範囲を記されている。該当場所は当時洞海湾が迫り、そんなに広い空間は望めない。何れにしても、「慶

長年間筑前國圖(写)」の山下町と殿町屋敷を、黒崎城勤番の武士団の居住と読み取ることは判断に苦しむ。

郷土史家の間では元禄十三年(一七〇〇)に開始された城石開作の折に黒崎城の石垣を壊して築堤に用いたという話^(註10)が流布しており、また、近代の給水池建設にともない郭部分が著しく破壊されていることなどから、黒崎城の破却について判断しかねていた。今回は慶長期石垣・元和元年の破却の比較研究から、破却されていると判断した。特に鷹取城の石垣上部を破壊し石垣を埋めた状況と、道伯山の頂上付近の斜面に天場を破壊した石垣列が観察できる現状とは、良く似ていて参考となる。

益富城

益富城は大隈城とも呼ばれ、嘉麻市嘉穂町中益字城山に所在する。秋月氏の巨大城郭のほんの一部^(註11)を慶長七年に黒田家重臣後藤又兵衛基次が高石垣、瓦葺礎石建物、枡形小口をもつ城郭に改修している。字図によると益富城の西側麓にかなり広い範囲に字城下とある。これを地理的に城の下と解するのか、城の下にある集落と解するのか、判断に苦しむところである。字城下の一角に館跡が確認できることから武士団の集落の可能性を指摘しておく。また、「慶長年間筑前國圖(写)」も益富城の西側に山下町の範囲を記しており、その位置は字城下と一致する。「慶長年間筑前國圖(写)」は山下町と大隈町と中益村はそれぞれ書き分けられている^(註12)。(図3)

こども、後世に石垣の石を取つて転用したとの言い伝えもある。平成十三年、同十四年に実施された発掘調査報告書^(註13)の写真をみると、破却は行われたと見てよい。慶長十一年(一六〇六)に後藤又兵衛が筑前を立退した後、母里太兵衛友信が城主となる。かれは、元和元年六月六日死去しているので、長政の命を受けて実際に破却を行ったのは息子の

母里左近友生である。

麻天良城

麻天良城は左右良城や真寺城とも書き、朝倉市杷木町志波の左右良山頂にある。中世の城郭を慶長七年に黒田家重臣栗山備後利安が高石垣、瓦葺礎石建物を持つ城郭に大改修した。山麓に字里城がある。里城は館のことであり、栗山利安の館跡と思われる。「慶長年間筑前國圖(写)」も麻天良城の南麓に山下町の範囲を記している。(図4)しかし、城下町を示すような遺構は確認されていない。

城郭は石垣の上部や角が崩れているのが観察できることや鷹取城の例を参考にすると破却と見てよい。

若松城

若松城は北九州市若松区と戸畑区の間、洞海湾の中に浮かぶ中ノ島に造られた城郭である。戦国期小田村氏の詰城に黒田家重臣三宅若狭家義が手を加え大改修したものである。北九州市史に「慶長七・九年知行高書附」をもとに、「三宅若狭家義は船手衆の筆頭で「御馬廻衆式組被付、若松口押所中島居住」とみえている」と記している。

若松町には殿町や殿屋敷の字は残っていない。軍事的側面が強い中規模城郭の特徴を示している。なお、「慶長年間筑前國圖(写)」に山下町は記載されていない。(図2)

破却していると思われる。昭和十四年に内務省の洞海湾修築計画の一環として中ノ島は削り取られ完全に消滅してしまっているため、その実態を知ることができない。

東蓮寺城(図5)

東蓮寺藩は、元和九年(一六二三)に黒田長政の遺言によって、黒田高政にあたえられた。遠賀川流域の政治的中心地(今日の直方市の中心

部)として築城されたのが東蓮寺城である。藩主館¹⁵と武士(家臣団)屋敷とともに町屋、寺町などいわゆる城下町も羅城(堀と土塁)によって囲まれ守られており、城郭史上近世城郭の完成形態である。

図5として紹介した東蓮寺城図は直方市内の某神社が大切に保管していたが、諸般の事情で宮若市小方良臣氏が所蔵することとなったものである。この内容と現地の状況はよく一致する。

秋月城

秋月藩は、元和九年に黒田長政の遺言によって、黒田長興に与えられた。中世秋月城の故地に、新たに政治的中心地として秋月城を造った。秋月は谷間を利用した都市であり、羅城のような都市を囲む施設は確認できないが、自然地形がその役割を果たし、要所くは堀、土塁で防備している。谷間に残されている城下町遺跡には藩主館(城郭)、家臣団(武士団)屋敷、寺町、町屋などの区画が整然と残っており、東蓮寺城と同じ形態である。

三、論点

以上の八城跡を見てきた。これによって①破却、②縄張り、③支城主の性格は、城郭研究の面から江戸時代前期の政治的動向を解き明かす論点として浮上してきた。

①、破却について

筑前国六端城¹⁶とよばれた鷹取城、松尾城、黒崎城、益富城、麻天良城、若松城は城郭部の石垣上部または角を壊し、枳形小口を石や土を投げ込み埋め破却している¹⁷。家臣団などの居住地区は破壊されたかどうかは今のところ確認できない。城郭部の遺構(石垣)の状況から破却の時期を決定することは今の段階では困難であるが、六端城の破却は

貝原益軒の研究以来元和元年（一六一四）の破却とされている。

破却の時期は黒田家文書に残っている元和元年の安藤重信、土井利勝、酒井忠世連署奉書は重要な手がかりとなろう^{註18}。この連署奉書は大阪落城の直後元和元年閏六月に徳川幕府から黒田藩（諸国の大名）に出された奉書である。江戸幕府は大名統制策の一つとして一國一城という趣旨のもとに大名の本城（居城）を除くすべての支城を破壊することを命じたものである。中国西国雄藩の諸大名にはとくに嚴重に適應されたとされている。筑前六端城の破却也この連署奉書によるものと解されている。

『黒田家譜』によると、黒田家は国持も一國一城と理解している。『黒田家譜』の説明のとおりとすると、元和九年に造られた東蓮寺城、秋月城の築城をどのように解すればよいのであろうか。一國一城令とは江戸幕府がある限り一國に藩主の居城のみしか許されないと解されるのではなからうか。現実にはその後も支城（東蓮寺城、秋月城）を造っている。このように述べると、東蓮寺城、秋月城は城ではなく、陣屋、御館であるとの見解が示されるであろう。法制的な事はその道の方にお願ひするとして、東蓮寺城、秋月城は、土塁、堀、石垣などの施設で防備されており、城郭と何ら変わらない。国持大名には武装解除を迫り、陣屋、御館に格付けられた大名（支城主）には武装解除を求めないとすれば、主従関係が不安となり、また、令の抜け道となり、不合理である。元和元年一國一城令の発令は、幕藩体制の安定のため諸勢力の再編、とりわけ、どの勢力の武装解除を目したかの視点で分析することが有効であろう。

②、六端城と元和九年に造られたお城

六端城と新しく造られた二城の縄張りの特徴を見ることにしたい。慶長七年前後大改修された一群の城郭（御牧郡若松城、御牧郡黒崎城、

鞍手郡鷹取城、嘉麻郡益富城、上座郡松尾城、上座郡左右良城）は、主要部分（山頂部）に高石垣、枿形小口、瓦葺礎石建物をもつ近世城郭（織豊系城郭）として整備されている。この段階で「慶長年間筑前國圖（写）」に山下町の記載があるけれど、いつれの城郭も現地にその痕跡を確認することはできていないが、益富城、鷹取城、松尾城、左右良城などのように山頂部に城郭のある山の麓に里城（城主館）が確認できるものがある。都市が整備されたとすればどのような形態を取っているのであろうか今後の課題である^{註19}。

また、鉄砲町、横町、殿町などの字が見受けられる。これらが武士の居住を示すとすればそれは限定的な居住であり、黒崎城の場合、在地性^{註20}を残しながらも家臣化した武士団の存在をみるのが妥当である。

六端城破却後の元和九年に大改修、新規築城された一群（鞍手郡東蓮寺城、朝倉郡秋月城）についてのべよう。これらの一群は羅城（土塁と堀で囲まれたなかに城郭部と整然とした区画が残っている。この点は、絵図（図5）でも確認できる。字図、絵図などの史料から区画は家臣団（武士団）のみならず商人、工人の居住区が設けられていることがわかる。六端城との違いが歴然である。

言い換えると、農村（在地）から切り離された武士層の家臣化が進むのと同時に、農村から商人、工人などを切り離すことに成功したといえる。九州では天正十五年以降に巨大規模城郭（筑前国福岡城や豊前国小倉城など）として導入された武士団の在地からの切りはなしという、この特徴を元和一國一城令はより確実な枠組みとした。

③、中規模城郭の城主

中規模城郭（六端城）は藩主を城主とする巨大規模城郭の支城としての性格をもっている。元和元年に破却された支城（中規模城郭）の城主（表

一)は長年に亘って藩主とともに戦国動乱期を乗り越えてきた盟友としての性格をもち、独立性を強く持っている^{註21)}。何時盟主である藩主の地位と入れ替わってもおかしくない大身(重臣)たちである。支城主の独立性は在地支配と独自の軍事力で保たれてきた。その象徴として中規模城郭がある。

元和九年の東蓮寺城と秋月城の築城は、その支城主が黒田家一族である点は見逃せない。つまり、幕府は一国一城令を出すことによって、支城主から在地支配権と独自性の強い軍事力を剥ぎ取り、盟主から藩主としての地位を確立し安定させること^{註22)}を政策の一つとしていたように思える。一方身内を支城主にすることで黒田家は独自の兵力(家臣団)を残したことになる。

表一

城名	城主名(慶長六年から元和元年)
鷹取城	母里但馬友信 手塚孫太夫光重
松尾城	中間六郎右衛門統種
黒崎城	井上周防之房
益富城	後藤又兵衛基次 母里但馬友信 同左近友生
麻天良城	栗山備後利安
若松城	三宅若狭義家

四、むすびにえかえて

今回の論考で、最も留意し分析した点は支城(中規模城郭)にともなう山下町の実態把握である。絵図、字などでは、山下町存在を主張する見解も根強い、しかし、現地踏査からそれらしき遺構・遺跡は元和九年までみることができない。筆者が重視したことは山下町の住人は誰なの

か。武士団の駐屯(居住)なのか、武士、商人、工人の居住が意図されていたのかである。軍事政治的要素が主な城下町形成論の観点から『北九州市史近世』^{註23)}は、六端城の武士団は在地性を強く残していることを指摘している。

中規模城郭は、中世の城郭研究において戦争施設の一形態として用いた概念であり、必ずしも近世城郭研究において、適切な概念でないかもしれないが、近世初期、国持大名の藩内本城(巨大規模城郭)とともに政治的・軍事的・経済的な国内支配の要としての役割を担った^{註24)}。

しかし、時代とともにその役割も変化し、藩主(巨大規模城郭主)と支城主(中規模城郭主)の対立が表面化しつつあった時、元和元年の一国一城令が出されることによって、中世的在地性を基盤とした支城主の経済・軍事体制が解体された。この意味は大きい。

文末になつてしまつたが別府大学後藤重巳教授、別府大学白峰助教、小方良臣氏、古後憲浩氏、篠原一義氏、花岡興史氏、鞍手町歴史民俗資料館、北部九州中近世城郭研究会の諸兄のご教示、発表の機会を与えていただいたことに感謝の意を表したい。

註1 一九七九年 副島邦弘・近澤康治「福岡県中世山城跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIX』

一九九五年 廣崎篤夫『福岡県の城』

二〇〇一年 木島孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』

二〇〇一年 中西義昌・岡寺良「歴史史料としての戦国期城郭」『地

域資料叢書5』

その他に県や市町村教育委員会の発掘調査報告が多数発刊されている。北部九州中近世城郭研究会の情報誌が毎年2回発刊されている。

註2 二〇〇五年 花岡興史 「近世城郭の築城と破却」『史学論叢』第三五号

註3 一九九八年 中村修身 「北部九州の中世山城」『日本考古学協会一九九八年度大会研究発表要旨』

註4 二〇〇六年 小都隆 「中世城館跡分類研究の現状と課題」『中世城館の考古学的研究』

註5 それら小規模城郭は、極めてまれな場合を除いて建物施設を破壊するに止めている。

註6 二〇〇六年 中村修身 「豊前国の中世城郭について」『史学論叢』第三十六号

二〇〇六年 中村修身 「在地性城郭と非在地性城郭について」『大分県地方史』第一九七号

註7 一九八七年 副島邦弘編 「筑前鷹取城跡」『直方市文化財調査報告書第八集』

一九八八年 馬田弘稔編 「筑前鷹取城跡」『直方市文化財調査報告書第九集』

一九八九年 馬田弘稔編 「筑前鷹取城跡」『直方市文化財調査報告書第十集』

一九九〇年 田村悟編 「筑前鷹取城跡」『直方市文化財調査報告書第十一集』

註8 松尾城から空間的に約百メートル離れたあたりに往還に沿って上

町、中町、下町、新町がある。これは宿場町とみることができる。

註9 二〇〇二年 日高正幸編 「松尾城跡」『小石原村文化財調査報告書第8集』では破却に触れていないが、図版3(3)、図版4(2)、図版9(1)など多くの図版が破却されたことを示している。

註10 『福岡歴史資料第二輯』の付図。図全体と山下町の表記が異なっているで、確認のため一度実物を見たいとあちこち問合せをするも所在が分からない、御存知の方は御一報ください。

註11 通称城山開作と呼ばれている干拓事業で築堤などに使った石は、黒崎城の石垣の石と限定的な意味と見るより、城山の石（玄武岩）を使ったという程度の意味と解するのが妥当である。

註12 近年木島孝之氏の精力的調査によって明らかとなった秋月種実隠居所としての益富城の実態が明らかにされ、家臣団の駐屯地（滞在）としての機能を持つているようにも見える。ここが慶長七年以降も同様な役割（家臣団＝常備軍）の駐屯地に充てられたと見ることができ、家臣団の居住地区の特定は今後の研究によるべきであろう。

註13 字図などから、益富城から約二百〜四百メートル離れた嘉麻市大隈町を城下町（山下町）の一部（町屋）とする見解がある。大隈には中世以来の街道筋の町屋の存在を確認できる。都市の発展を考える時、交通の要所にできる町（宿場町や市場町など）と政治的軍事的要請からうまれる山下町とは区別すべきである。大隈町より中益村の方が益富城に近いことから大隈町を城下町とすることは差し控えるべきである。

註14 二〇〇四年 福島日出海 「益富城Ⅰ」『嘉穂町文化財調査報告書第二集』

註15 昭和四十五年三月までは主郭部(藩主館跡)に土塁が残っていた。
 註16 江戸時代初期の黒田藩の軍事と城郭について、二〇〇四年に小川賢氏は『地域史としての遠賀郡三五〇年史』(一)で独自の見解を展開している。本稿との関連では弥永城や古処山城が慶長期に機能していたのではと論じている。現地調査を踏まえて、今回は氏の説を取り入れなかったが、傾聴すべき点多々あり、今後検討していきたい。

註17 本稿では現地踏査をもとに破却場所を判断した。したがって、城郭のどの部分が破却されているかを知ることが限界であり、建物がどのような状況で破却されたかについては調査を行っていない。建物の破却については、二〇〇三年に校倉書房より発行された白峰旬氏「一国一城令と廃城の実態について」『豊臣の城・徳川の城』や二〇〇五年に織豊期城郭研究会より発行された『森宏之君追悼城郭論集』に収録された高田徹氏「飛驒・高山城の破却」が参考となる。

註18 急度申入候 仍貴殿御分国中居城をは被残置

其外の城悉可有破却の由上意に候 右の通諸国

へ申触候間 可被成其御心得候 恐々謹言

壬六月十三日 安藤對馬守重信

土井大炊助利勝

酒井雅樂頭忠世

黒田筑前守殿

註19 六端城と山下町を把握するには、都市の発展という概念の整理を

しておく必要がある。都市はその主たる形成要因によって門前町、

市場町、宿場町、城下町などにわけられる。城下町を取り上げる

註20

理由は長い戦国期の軍事的再編を物語っていることと在地政治の要であるからである。近世社会が成熟していく段階、とりわけ慶長期の後半は、中規模城郭の城主の持つ在地性が不安定要素となる。ここに中規模城郭(支城)破却の果たした意図を見ることができる。

一九九〇年に発行された『北九州市史 近世』は「慶長初期における農村支配政策を検討する場合に、無視できないのが在郷給人の存在である。豊臣政権期に農兵分離が行われ、その結果武士団の城下町集住が進んだはずであるが、黒田長政入部後六端城を預けられた有力家臣はその家臣団を農村に在宅させて農民経営に当てるところがあった。その具体相を見るために、黒崎城を預けられた井上周防之房の事例を検討しよう。井上之房は筑前入部後、(福岡)城内三ノ郭西側の角に邸宅を下賜されたが、黒崎城の営築が終了した後それを預けられて、知行高は之房が一万六六〇〇石、長子右近一利が二〇〇〇石余であったという。そして家臣は黒崎・六生・陣原村その他の村々に分住させられた。」と論じ、左表「井上之房家臣団の知行地」を示している。井上周防之房の家臣(武士)は、黒崎城下に居住はしておらず、農村に居住していることを明らかにしている。すなわち、家臣団は中世以来の在地性を強く残しているといえることを明らかにしている。

井上之房家臣団の知行地(慶長初期)

知行地	知行高	地行主	居宅地
本城村	七五六石	大野左馬右衛門	本城村
穴生村	一〇三石	大野五郎太夫	本城村

大蔵村	五八四石	大村六郎左衛門	塩屋村
折尾村	二一〇石	疋田小三次	折尾村
穴生村	一〇二石	疋田小平太	折尾村
折尾村	二四二石	大野十左衛門	不明
穴生村	一八〇石	岡村七郎兵衛	不明
則松村	六八〇石	大野勘右衛門	則松村
則松村	三〇一石	井上伝右衛門	永犬丸村
則松村	二二〇石	高橋八郎右衛門	永犬丸村
則松村	一〇一石	久芳与三右衛門	永犬丸村
則松村	一〇一石	篠川弥吉	香月村
香月村	二五〇石	三輪左近右衛門	香月村
尾倉村	二〇二石	岡田作兵衛	尾倉村
尾倉村	三〇二石	原田専右衛門	尾倉村
永犬丸村	一〇一石	長瀬五郎右衛門	尾倉村
永犬丸村	二〇三石	井上八兵衛	前田村
永犬丸村	一五七石	中西四郎兵衛	尾倉村
永犬丸村	八二石	野依忠右衛門	尾倉村
枝光村	八五石	原田百助	枝光村
穴生村	一〇〇石	上月藤左衛門	福岡
引野村	四二〇石	川越清兵衛	福岡
引野村	一六三石	富田仁左衛門	福岡

（石高は四捨五入した。）

註21 藩主と盟友の独立性を示す事件として、後藤又兵衛の出奔、鷹取城大改修に対する黒田長政と母里太兵衛との確執、栗山備後利安の事件など数挙にいとまがない。

註22 豊前国細川家が小倉城を本城とし中津城を隠居城として残すことを幕府に申し出て許可されたのも藩主家の安定という観点からみると、黒田家と同じ対応といえる。

註23 註20に同じ

註24 二〇〇五年 中村修身 「お城と城下町の発展」 『北部九州中近世城郭情報紙9』

参考文献

- 一六二八年 貝原益軒 『筑前国統風土記』
- 一六八七年 貝原益軒 『黒田家譜』
- 一九三五年 若松市役所 『若松市史』
- 一九七二年 嘉穂郡役所 『嘉穂郡誌』
- 一九九〇年 北九州市史編纂委員会 『北九州市史近世』
- 一九七〇年 直方市 『直方市史』
- 二〇〇一年 木島孝之 『城郭の縄張り構造と大名権力』
- 二〇〇三年 白峰旬 『豊臣の城・徳川の城』 校倉書房
- 字についてはつぎの書籍を参考とした。
- 一九三五年 若松市役所 『若松市史』
- 一九七二年 『福岡懸史資料第二輯』 福岡県編
- 一九七二年 『福岡懸史資料第六輯』 福岡県編
- 一九七二年 『福岡懸史資料第七輯』 福岡県編
- 一九七二年 『福岡懸史資料第九輯』 福岡県編
- 一九六一年 『増補改訂遠賀郡誌下巻』 遠賀郡誌復刊刊行会
- 一九七〇年 直方市 『直方市史』

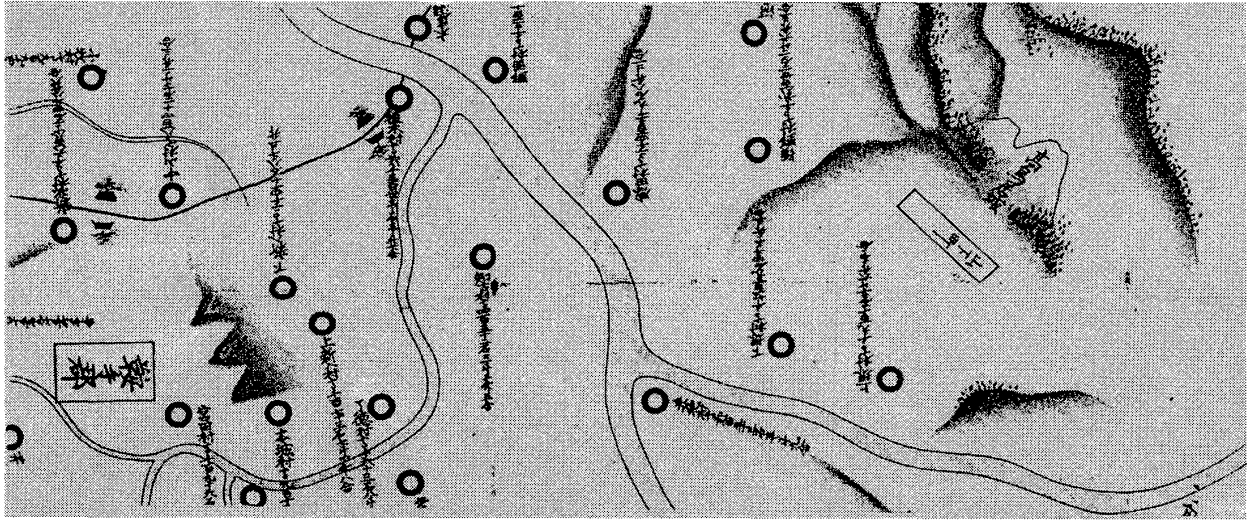


图1 高鳥居城（鷹取城）（『慶長年間筑前國図（写）』一部を転載）

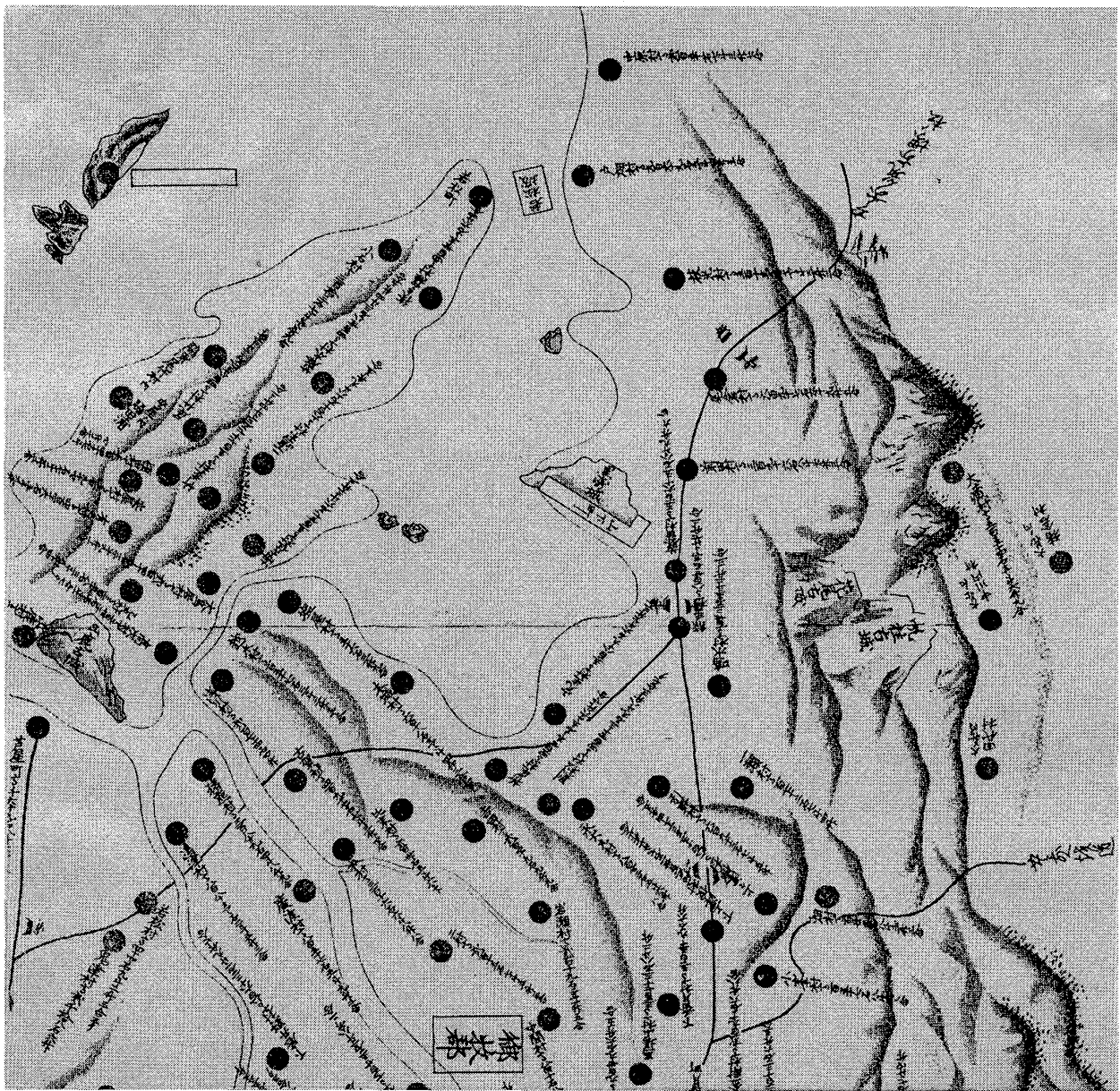


图2 若松城・黒崎城（『慶長年間筑前國図（写）』一部を転載）

図3 大隈城 (益富城)
 (『慶長年間筑前國図 (写)』
 一部を転載)

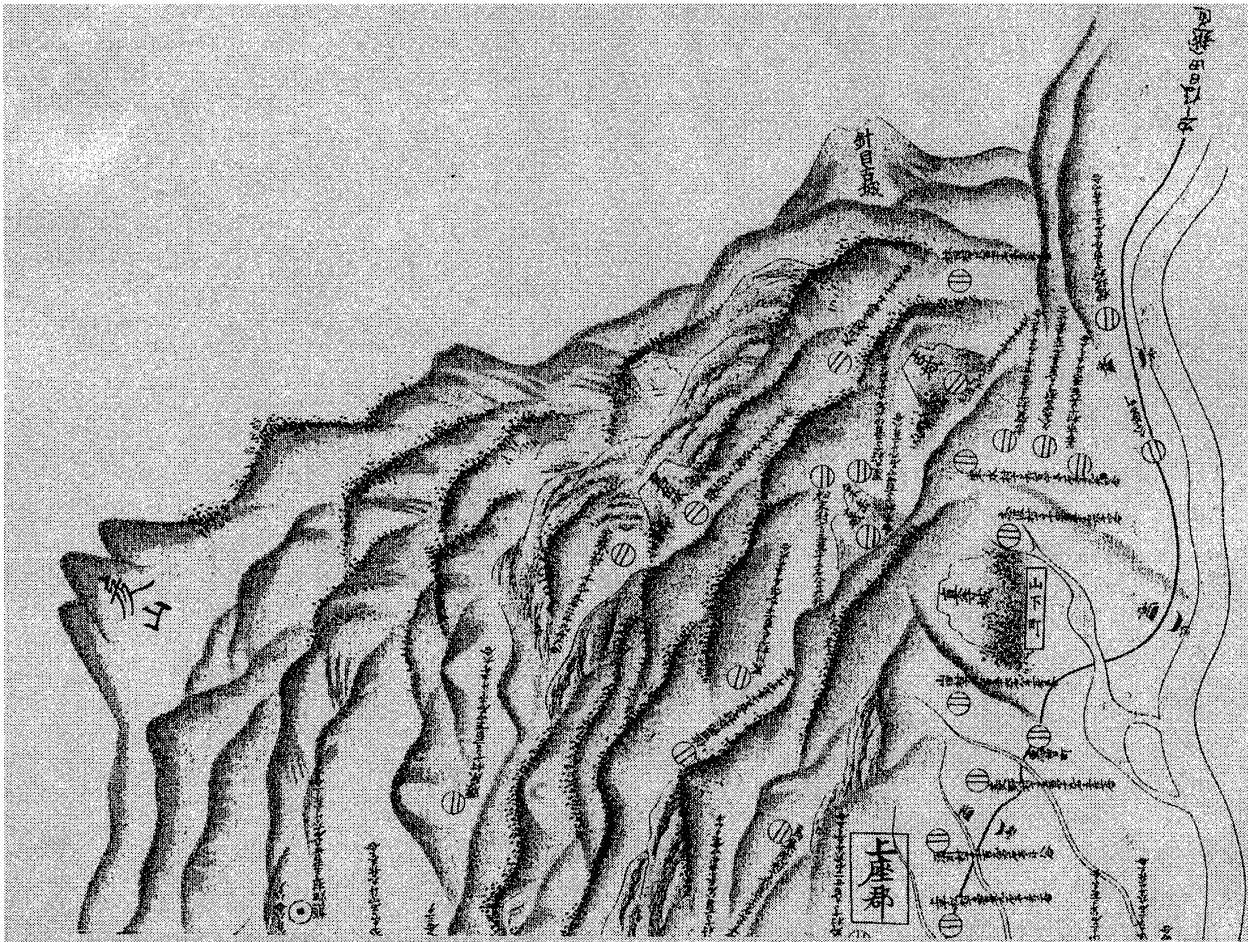
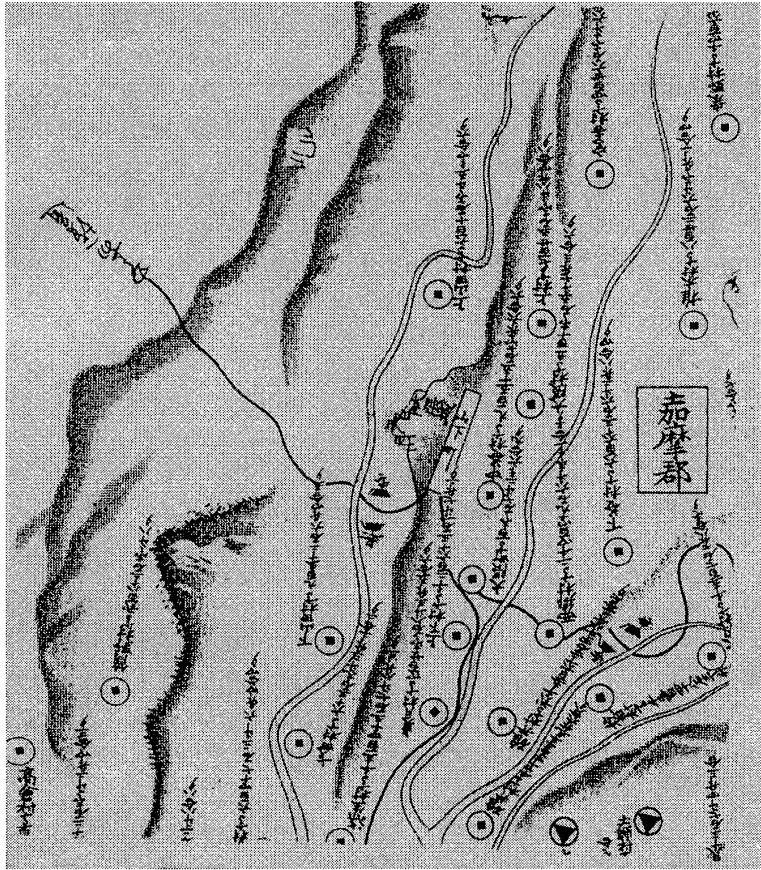


図4 真寺城 (麻天良城) (『慶長年間筑前國図 (写)』一部を転載)

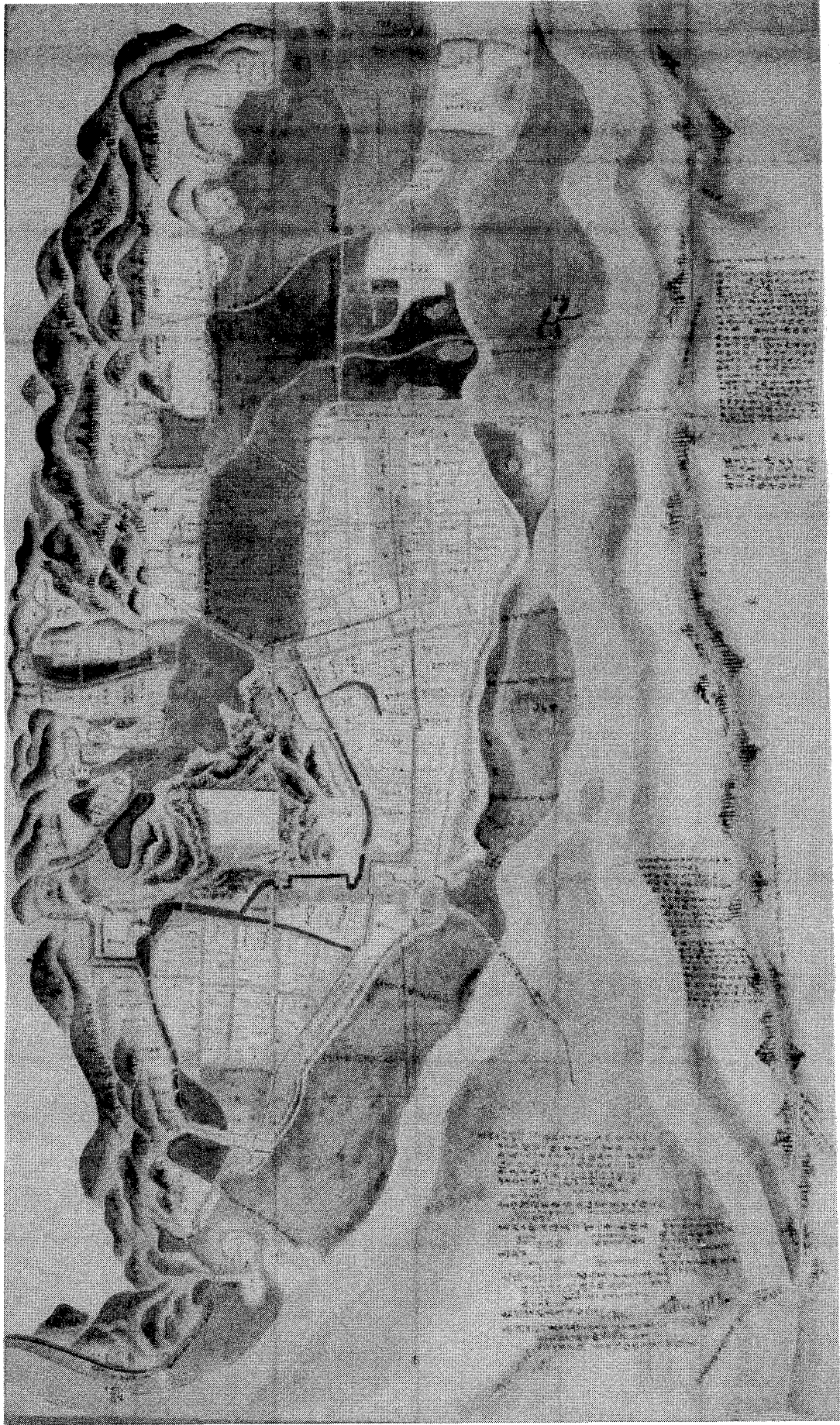


图5 東蓮寺城絵図 (小方良臣氏蔵)